

ラ病の予防など、判り易い親切的な説明。

岸田吟香：天保4（1833）—明治38（1905）。岡山の人。18歳で江戸に出て林図書頭の塾に入る。元治元年（1864）4月頃、眼を病み、横浜在留の米国人医師ヘボン博士〔日本滞在：安政6（1859）—明治25（1892）〕の点眼治療を受けて全快。学職才能を認められて、ヘボン編纂中の「和英語林集成」の手伝いとなる。3年を経た慶応3年、同辞書はみごと刊行された。

その後、岸田はヘボン博士創製の眼科治療薬を調剤し、博士了解の下「精錡水」と名づけ、明治5年から販売を開始した。8年9月銀座2丁目に「精錡水調合所（楽善堂薬舗）」を設け、大々的に売出す。卓越した宣伝力と努力により、「精錡水」の名は天下に広まった。他方、慶応4「横浜新報もしほ草」を創刊。明治6「東京日々新聞社」主筆、台湾征討の従軍記者で活躍。

以上、明治初期後半における有喜世新聞の広告を通覧すると、当時の社会状況のあらましが分かり、その中に文明開化のきざしを点々と感じとることができる。

18) 新町・於菊稻荷神社（おきくいなりじんじゃ）に奉納された「歯科医の絵馬」について—第2版—

A Study on the “Ema of Dentist”, dedicated to the Okikuinari Shrine at Shinmachi.
—Part. 2—

池園歯科研究会 ○湯浅 高行
藤野 瑠男
日本歯科大学 屋代 正幸

Takayuki Yuasa, Yoshio Fujino, Ikezono
dental research group Masayuki Yashiro,
The Nippon Dental University

高崎市（旧多野郡）新町に鎮座する於菊稻荷神社は、多数の絵馬を所蔵することで知られており、その中の2点の絵馬が、町有の文化財に指定されている。その絵馬の中に、明治初年に神社近隣で開業していた歯科医師が奉納したと思われる、しっくい製の絵馬が現存している。

演者らは、昨年の日本歯科医学学会学術大会に

おいて、この珍しいしっくいの絵馬の報告をした。絵馬の材料にしっくいを使い、取材した内容を立体的に表現し、その上に彩色を施した絵馬は、現存するものとしてきわめて少ないようだ。このようなことから、このしっくいの絵馬は、学術的に貴重な資料だと思われる。そこで今回は、この絵馬を再度くわしく検証し、他の絵馬との比較検討を加え考察したいと思う。

19) 『口歯類要』にみられる口瘡治験例の一考察

Studies on the Kōshiruiyō

医の博物館 ○西巻 明彦
陶 栗嫻
日本歯科大学 屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, Suxian Tao, *Museum of Medicine and Dentistry*, Masayuki Yashiro, *Nippon Dental University*

緒言

『口歯類要』は、1529年薛己の著となる書物で、口歯専門の書として有名であるが、現実には、口唇、口瘡、歯痛、舌症、喉痺、喉痛、諸骨稲谷発癰、諸癰呪法の治、水蛭の誤飲、蛇七窮より入る及び虫咬傷、諸虫入耳、男女体気の十二章に分かれ、かならずしも、現代歯科医学との治療範囲は一致していないことが特徴的である。

日本においては、『口歯類要』の和刻本は、『薛氏医案十六種本』に収録され、承応三年（1654年）京の武村市兵衛方から出版されている。『薛氏医案』が現在までのところ、和刻されたのは、承応三年（1654年）の『十六種本』一回限りで、もう一系統の『薛氏医案二十四種本』は、和刻は全編にわたっては行なわれていないようである。『口歯類要』は、『十六種本』、『二十四種本』いずれにも、収録されている。

今回、『口歯類要』の口瘡において考察を行った。

症例

症例1 49歳男性。会社員

現病歴：昨日、いささか過度に酒を飲んだところ、口唇がたらこの様に腫脹し、疼痛がある。

現症：脈は弦で、腹診によれば胸脇苦満がある。

舌体は紅色が強く、白苔が厚い。

治療及び経過：黄連解毒湯合小柴胡湯（1日分両者エキス剤7.5g）を投薬。3日目でほとんど腫脹がとれ、5日目で廃薬。

症例2 53歳女性、店員

現病歴：数年前より口唇、口腔がしびれ、腫脹したり、軽快したりをくり返している。CO₂レーザーを照射すると、腫脹、異和感が一時的に解消する。

現症：脈は沱弱、舌は薄白苔、腹診をすると胸脇苦満がみとめられる、肩こりも供っている。

治療及び経過：最初、小柴胡湯を投与（エキス剤7.5g）したところ、効果が認められなかった。一週間後症例1にならい、小柴胡湯に半夏瀉心湯（エキス剤7.5g）、を合方して投薬したところ、3日目から症状が改善し、1カ月で回復した。

考察

『口齒類要』の口瘡の章に、一婦人、口が苦く腫れているところに小柴胡湯、山梔子、黄連で少なくとも愈ゆという治験例が記されている。症例1は、上焦の実熱であり、症例2は、中焦に原因があり、『素問』五藏生成篇第十「脾の合は肉なり、其の榮は唇なり」に対応すると考えられる。

20) 蕪村の齒に関する発句の研究

Studies on the Busonn and Dentistry

医の博物館 陶 栗嫻

Suxian Tao, Museum of Medicine and Dentistry

蕪村の発句で、齒に関する句は有名なもので二句存在し、

はらの中へ 齒はぬけけらし 種ふくべ
齒豁に 筆の水を かむ夜かな

である。

蕪村は、本来絵師として有名であるが、芭蕉一其角一宋阿一蕪村とつながる系譜の中で位置づけられ、十八世紀後半の蕉風復古運動の中心人物としての一面を持っている。しかしながら、蕪村は当時の職業俳諧師とは異質の異端的俳諧師でもあったという評もある。

蕪村は、享保元年（1716）摂津国東成郡毛馬村

で生まれ、享保二十年（1735）までに江戸へ下り、俳諧、書、観世流謡曲、漢詩を学んだとされるがはっきりしたことはわかっていない。元文二年に日本橋元石町三丁目夜半亭の宋阿に入門している。宋阿没後、延享元年（1744）宇都宮で『蕪村歳旦帖』を刊行し、初めて蕪村の号を用いた。宝暦元年（1751）には、木曾路から京へ上っている。

『蕪村句集』の川田田福の跋文には、「夜半翁常にいへらく、発句集はなくてもありなんかし。世に名だゝる人の、其句集出て、日来の声誉を減ずるもの多し。況や、汎々の輩をやゝと。」述べ、俳人は自分の句集をださないことを蕪村は口癖にしていたという。さらに蕪村は、門人大魯の遺稿集『蘆陰句選』の序で、『遺稿は出さずもあらなん。いにしへより作者のきこえあるもの、遺稿出て還て生前の声誉減ずるものすくなからず』と記している。その反面、百池宛書簡に、「句帳は来春迄御予り申置候。春に至り、愚老句集、佳業世話にて急々出版いたし申つもり候故、句帳とも引合せゑらみ申度候」と述べ、相反することを行う蕪村の性格的複雑さがうかがえる。結局、生前には蕪村の句集は出版されず、それどころか、自撰自筆句帳は天明三年（1783）十二月二十五日六十八歳で没した後、散佚してしまった。

現在、蕪村の句として知られるのは、約二千八百句であり、多くは『蕪村句集』と『蕪村遺稿』によっている。『蕪村句集』は、几重（1741～1789）により、一周忌追福のため編集された。齒に関する発句は、『蕪村句集』に収載されている。

「腹の中へ 齒はぬけけらし 種ふくべ」は、『蕪村句集』秋に収載されている。ふくべとは、瓢のことで、軒下につるされたふくべの腹の中に瓢の種が落ちた様子がうかがえる。瓢の種は、人間の齒に似ていることから、種を齒に見立て、腹の中に落っこちた齒が秋風にゆられて、音をたてている様子を発句している。人間の老化と、齒抜ける様子を直接的に読むのではなく、齒を種に人の体を瓢に見立て、風にゆられて鳴る種は、人の無情を感じより、むしろ明るいユーモアを想起する優れた発句と考えることができる。一般に齒は、老化ととらえて発句する傾向は芭蕉に強く、もののあはれをさそうが、この発句は老化の象徴として詠まれているものの、それをつきぬけて芸術的に昇華した発句であり、むしろ芭蕉の「軽み」に